
チートな能力を持って転生した高校生

篠山 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チートな能力を持って転生した高校生

【Nコード】

N7226T

【作者名】

篠山 光

【あらすじ】

俺こと神谷 錦司は今まで普通に暮らしていたんだ！そしていつの間にかネコミミ幼女な神のミスで死んで異世界に転生して、死ぬ前は色々と厄介事に巻き込まれるしさああ！
波乱万丈もいいとこだよ？！

この作品はさまざまなアニメや漫画、小説のキャラが使ってる技などを使おうと思ってますのでそういうのが嫌いな方は御控え下さい。

ぶろろーぐ（前書き）

チート物語です

頑張って完結させたいと思いますのでよろしく願います。m

——）m

感想など頂けると励みになり、更新速度があがるかと思われます。w

w

ぶろろーぐ

やあ、俺は神谷^{かみや} 錦司^{きんじ} 16歳 高校2年生さ。
え？歳と学年が合ってないって？だってそりゃ遅生まれだからな。
当たり前だ。

俺は今、全力で現実逃避しているところさ。

なぜかって？普通に友達と遊んでたらいきなり目の前が真っ暗にな
って、気がつく俺の前にネコミミ幼女がいるんだぜ？受け入れろ
ってほうが無理さ。

『・・・そろそろ真面目に私の話、聞いてほしいんだけど？』

あゝ、幻聴が聞こえるゝそしてなぜか声聞いただけなのに胸がペッ
タンコなネコミミ幼女の姿が浮かんできたよゝ

『ぺ、ペッタンコで悪かったわねー！！それと私は神よ』

ぐちゃ！

ぐおおお、猛烈に頭がいてえよ、ってかハリセンで殴られただけな
のにぐちゃって音はおかしいだろ？！

『このハリセンは特注品ですから』

ネコミミ幼女な神は無いむ・・・ゴリツパナ胸を張って自慢してき
た。

ん？

「お前、ひよつとして俺の心の中読んでる？」

ふと思ったことをネコミミ幼女な神に聞く。

『ここは神の部屋よ？そんなところに人間が来たんだから人間の心
読むなんて出来るにきまつてるじゃない！』

「神の部屋か・・・ん？なぜ俺はこんなとこにいる？」

「それはあなたが死んだからよ」

・・・エーナンダッテー

『だからあんたは死んだんだってば』

「・・・いやいやいや！なんで俺死んだの？！普通に友達と遊んでただけだったよねえ？！」

『貴女の死因は私のミスよ』

「・・・今あなたのミスで俺が死んだように聞こえたんですが気のせいですか？気のせいですよ？気のせいって言ってくれええ！！」

『残念ながら事実よ』

『自分のミスを胸張って言うなあああ！！』

『あなた、なかなかやるわね・・・』

「プーさん蹴るなあああ！！」

『あはははは！！あんた面白いわね、突っ込みと同時にボケるなんて人じゃないわ』

「俺は人だああああ！！」

「・・・こいつと話しているとめっちゃくちや疲れる！！」

「で、俺はこれからどうすればいいんだ？」

『私のミスで死んだからあんたは違う世界に転生してもらうわ』

「転生？」

『そ。その世界には魔物や魔王、人間族や、亜人族など色々な生物がいるわ』

「ふむふむ。楽しそうだ」

『あんたを死なせてしまったお詫びに転生するときに願い事を5つ叶えてあげるわ』

「その願い事はなんでもいいのか？」

『ええ。なんでもこいよ』

「じゃあ

1：魔力無限

2：頭の中でイメージした物の具現化能力

3：あらゆるアニメ、漫画、小説の技・魔法が使えること

4：魔法創造

5：魔法を詠唱なしで発動出来る

の5つで頼む」

『わかったわ。じゃあいつてらっしゃい』

「ああ、行ってくる」

目の前が真っ白になった。

意識が消えゆく中、ネコミミ幼女な神の声が聞こえた。
「ごめんね」

「……たく、素直じゃねえな。いや、俺もか——」

ぶろろーぐ（後書き）

では、感想待ってマース？！

第1話（前書き）

本編です

第1話

俺は気がついたら森の中に居た。

「・・・なんかありきたりだな」

俺がため息ついたら頭の中にネコミミ幼女な神の声が響いてきた。

『ひとつ謝らないといけないことがきちゃった』

「・・・こいつミス多いなあ!!」

「・・・なんだよ?」

『間違つて魔物の前に転送しちゃった! テヘツ』

ネコミミ幼女な神の声を聞いた瞬間、俺のちょうど後ろから――

ギヤオオオオオオ!!!!

という声が聞こえてきた。

「テヘツ　じゃねえええ!!」

『しかもその魔物の強さはM。P2ndGのヤマ。カミ並み』

「かなりつええじゃねえかああ!!」

ちなみに俺はヤマ。カミを一人で倒せない。

そう言うが早いか俺は魔物がいる反対の方向へと全力で駆けだした。

『なんで逃げるの?』

ネコミミ幼女な神・・・いづれえなネコ神でいいか。ネコ神は心

の底から分らないといった感じに聞いてきた。

「あんなのと出会ったらぜってえ逃げるだろ!!」

『今のあんたにはチート級の力持つてるじゃん』

「・・・すっかり忘れてたああ!!!!」

「そつえばそうだったな」

俺はぽんつと左手の平に右手を握り、右拳の親指を上に向けた形で振り下ろした。

『忘れてたんかい!!』

俺のボケにネコ神が突っ込むほどおかしかったらしい。

ふと後ろを見るとヤマ。カミ並みの強さを誇る魔物もずっこけてい

た。

「・・・魔物もずっこけるんだな」

『・・・みたいだね』

よし！ちょうどいいし、レー。ガンのあれで倒しますか！

俺はおもむろに右手をポケットにつっこみ、百円玉と同じくらいの大きさのコインをとりだし、右手を魔物へと突き出し、コインを高々と上へとはじいて落ちてきたコインをタイミング合わせてデコピンで少しの電気を織り交ぜながら、魔物へと打ち出す。

ズギヤアアアン！！！！

というものすごい音が轟き、魔物は跡形もなく消滅していた。

「・・・」

『・・・』

その威力に俺とネコ神が開いた口がふさがらないほどだ。

「・・・少し抑えたほうがいいな」

『・・・そうだね』

「で、俺の近くに居るネコ神は俺に何の用なんだ？まさかさっきのだけじゃないだろ？」

俺はすぐ近くの空間に居るであろうネコ神に向けて問いかける。

すると、俺の横の空間が縦に裂けて中からネコ神が出てくる。

「・・・あんたって一体何者？なんとなくとはいえ私があなただのすぐそばの空間に居ることがわかるなんて」

「ただの人間だよ、ってかネコ神については何も言わないんだな」

「だってほかの神からよく言われてるし・・・まあいいわ。これから話すことが本命ね」

・・・こいつも色々と苦労してるんだな

俺はそう思ったがそのことをおくびにも出さず返事した。

「ああ」

「・・・て。」

ネコ神は俯き、手を胸のあたりでもじもじと人差し指と人差し指の先をつんつんしながら誰にも聞こえない声だったからもう一度聞き返す。

「え？ごめん、聞こえなかったからもう一度言ってくれ」

ネコ神はすう～はぁ～と深呼吸してから意を決したように此方をまっすぐ見据えてはきはきと言った。

「私も連れて行ってほしいの！」

・・・エ？

俺は予想すらしていなかったことに衝撃を受け、30秒ほど頭がフリーズしていた。

俺の意識を呼びもどしたのはネコ神の声だった。

「ね、ねえ、聞いてるの？」

ネコ神は緊張しているのか顔を赤らめながら俺の服のおなかあたりをつまみ、涙目で見上げてくる。

「き、聞いてるよ」

予想以上のネコ神の涙目の威力に圧倒されてフリーズしていた頭もすっかり稼働した。

「でもお前は神だろ？自分の仕事ほったらかしていいのか？」

俺の言葉に少し考えるような仕草を見せ、その後「大丈夫」と言った。

「そうなのか？」

「うん。だって神といっても何もすることないし退屈だからあんたと一緒に居たかったのよ。・・・やっぱりダメ？」

またもや涙目で見上げられたからあわてて答える。

「いい、いや！ダメなんて言っていないぞ！むしろ一緒に居てほしいくらいだ！」

神とはいえ見た目が俺より小さい子に泣かれては俺のプライドが許さなかったなのでその場で最善と思われる言葉を言うことにした。

・・・まあ、それが俺の本音だったりするのだが

「ほんと?! よかったあゝ、断られたらどうしようかとおもっちゃった・・・」

一瞬、寂しそうな顔になったネコ神に手を差し出す。

「改めてこれからよろしくな」

俺の言葉に気付き、俺が差し出した手をおずおずとゆっくり握ってきた。

「ええ、こちらこそよろしく願いします」

第1話（後書き）

感想待ってマース?!!

第2話（前書き）

ある人から短いとご指摘を頂いたので今回は長いです

なので誤字があると思いますのでもし見つかればご一報くだると
うれしいです

第2話

そんなこともあり、俺とネコ神もとい、サヤカ・ナイカルは魔物と遭遇することなく、森から出ようと歩いていた。

「しかし、あれだな。今までアニメや小説で見ていた技が実際に来るとなるとなんか違和感感じるな」

俺はしみじみと思ったことをサヤカに話す。

「それはなんとなくだけどわかるわ。私だって人間だったころ、そういったことにあこがれていたからね」

「・・・ん？こいつ今、『人間だったころ』って言わなかったか？

「ちよつと待て！お前今、『人間だったころ』って言わなかったか？」

「言ったわよ？」

「神って元は人間だったのか？！」

俺の驚きにサヤカは今更？って表情で錦司を見た。

「あたりまえじゃない。まあ、最高神デユノアは生まれつきの神だけだね。そのほかの神は人としての一生を終えた後、輪廻転生の輪から外れて神として転生するのよ。その神を選定しているのも最高神デユノアよ」

「そうだったのか・・・」

話をしているうちに森の出口が見えてきた。

森から出るとそこには広大な草原が広がっていた。

草原の奥には街のようなものが見えた。

「とりあえずあの街まで行くか？」

眠いのか欠伸をしていたサヤカに問う。

「うん、まず街へ行って情報を集めないとね」

目的も決まったことだし街まで飛んでいきますか！

「街まで飛んで行くか？」

俺の発言に驚いたような表情に一瞬なるが、すぐに納得の表情を浮

かべ肯定の意思を告げる。

「んゝ何をイメージするかな？」

管理局の白い。魔でもいいし、Angel。eat s!のか。でもいいし、シ。ナでもいいな。

「よし！あれでいいや」

俺にはコ。ドギアスの力。ンのナイトメアの紅蓮可翔式のエネルギーウイング、サヤカにはシ。ナの炎の翼をイメージする。

そして、技名を発声する。

「飛翔魔法付与、対象：自分、サヤカ」

飛翔魔法付与の呪文を唱えた途端、俺とサヤカの背中にイメージ通りの翼が生える。

「・・・なんかすごい力与えちゃったわね」

「おかげで気分がウハウハだぜ！」

「ちなみにどうやってたら飛べるの？」

「自分は飛べるって思えば飛べる。その後は行きたい方向を念じるだけでその方向に飛ぶことができる」

ちなみに俺の翼は背中から少し離れた所からエネルギーウイングが出ていて、サヤカは肩甲骨のあたりから紅い何もかも焼き尽くしそうな炎のような翼が生えている。

「じゃあ行くか」

俺たちは街へと向かった。

??? side

「あれはいつたいなんですの？」

私はふとのぞいた窓から見えた遠いところに飛んでいるように見え

る黒い点2つを見ながら隣に居た宰相に問いかけたのですわ。

「あれは・・・人、ですかね？一人は15、6歳の全身黒い服に身を包んでいる若い男性でもう一人は男性と同じく15、6歳の白い服に身を包んでいる若い女性・・・ですね、マリア様」

その宰相の顔は信じられないものを見たような表情をしていましたわ。

そして私は宰相の言葉に愕然としたのです。

「人？！それは本当ですか？！」

だって当然でしょう。今まで飛翔魔法は机上の空論と言われていたのに人が飛んでいるんですよ？これを驚くなど言うほうが無茶というものですわ。

なぜ飛翔魔法が使えないと言われていたのかというとまず第一にイメージが出来ないからです。中途半端なイメージですと意図しないところに飛んで行ってしまう、イメージ出来ても魔力が足りず、実用には向かない魔法として今では研究すら投げ出している状況ですの。

飛翔魔法は他の魔法に比べ、魔力消費が半端なく多いのです。宙に10秒浮くだけで並の魔術師10人分の魔力が必要ですのよ。

ここでいきなりではありませんが魔術師について説明しておきましょうか。

SSS級魔術師：魔力1000以上、多彩な魔術が使えることが条件

SS級魔術師：魔力800以上999以下、最低2属性の上級魔法が使えることが条件

S級魔術師：魔力600以上799以下、1属性の上級魔術が使えることが条件

A級魔術師：魔力500以上599以下、すべての属性の中級魔法

が使えることが条件

B級魔術師：魔力400以上499以下

C級魔術師：魔力300以上399以下

D級魔術師：魔力200以上299以下

E級魔術師：魔力100以上199以下

F級魔術師：魔力1以上99以下

以上のような組み分けがあるのですわ。

上のランクに昇級するには試験があつてそれに合格しないと上のランクに上がれないのです。

そして並の魔術師はC級魔術師なのです。

つまり、彼らは最低でも魔力は3000はあるのでしょうか。

そのことが分かった途端、私は彼らがほしくなりました。

幸い、彼らはこの街を目指しているようなので近衛兵を向かわせてここまで招待しましょう。そうと決まれば即実行です。

「宰相、近衛隊に彼らがこの町へ入ったらここまで招待するよう向かわせて下さるかしら？」

「御意」

side out

錦司&サヤカ side

俺たちが街に入ると兵に囲まれた。

「・・・なあ」

「・・・なに？」

「俺たち、何か悪いことでもしたか？」

「してないに決まってるじゃない」

「じゃあなんで街に入った途端に兵に囲まれるんだ？」

「さあ？私だつて分からないわよ」

俺たちは困惑しながら今の状況について話し合っていた。

すると、俺たちの真ん中に立っていたこの隊の隊長と思わしき人物が俺達の前に進み出てきた。

「貴殿達は先ほどそれを飛んでここまで来た者たちか？」

その人物の発言に周りに居た兵士たちが騒然となった。

「ああ、そうだが？」

「そうか。では、我らとともに城まで来てほしい」

「・・・エ？ナンダッテ？」

「城に？俺らが？」

「ああ、それが姫の希望なのでな。悪いが拒否権はないぞ」

姫が俺たちに会いたいと言っているのか？！なら行くしかないだろう！

「ああ、わかった」

「私も異論はないわ」

「決まりだな。ではついて来てくれ」

俺たちは隊長について城まで行った。

side out

マリア side

宰相に彼らをここへ招待するよう申しつけてからというもの、そわそわして集中出来ませんわ。

私の部屋にあった本を読んでも彼らのことが気になって内容が頭に入りませんし私が毎日欠かさず行っている楔みそぎの最中にも彼らのことを考えていしまっている始末。

今は彼らを迎える準備も整い、彼らの到着を待つのみです。そこで私の近衛隊隊長が私の部屋に来て、

「姫様の報告にあった人物を連れてまいりました！」

と報告がありましたのですぐさま応接室へと向かうのです。

side out

俺らは今とても豪華な部屋で待たされている。

俺たちをここへ案内した隊長と思わしき人は姫様を呼びに行った。待たされること10分、その姫様とやらはやってきた。

ブラチナフロンド

その姫はとてもきれいで白金色の髪色で身長は156cmと小柄で何と言っても可愛い！！

くりっとした目も可愛いしよく見ると右の目の色と左の目の色が違った。これは俗に言う虹彩異色症こうさいいしよくしやうじやうというやつだろうか？

そして目の色はというと右の目の色は金色で左の目の色は銀色だった。

服装は大きな胸を強調するような露出の多いピンクのドレスを着ていた。

思わず俺とサヤカは見とれていたが姫の挨拶で現実へと引き戻される。

「初めまして。私はこのサリーナ国国王の娘、マリア・スター・カグラと申します。マリアとお呼び下さいませ」

マリアの声はとても透き通っていて聞き惚れるくらいに綺麗だった。

「俺は神谷 錦司だ」

「私はサヤカ・ナイカルよ」

「キンジ様にサヤカ様ですか。いきなりですかひとつお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「ああ、いいぞ」

代表して俺が返事する。

「では・・・ここまではどうやって来ましたか？」

俺は少し考えるふりをして答えた。

「・・・飛んできた」

俺の言葉にマリアは分かっではいたが驚いたようななんとも器用な表情を浮かべていた。

「・・・飛んで、ですか」

「何かおかしいか？」

俺はマリアが気になったからとりあえず聞いてみることにした。

「おかしいに決まっています！どうやって空を飛んだんですか？！飛翔魔術なんて机上の空論でしたのあなた方はそれをあっさり覆して・・・そこのところ分かってるんですの？」

俺は面喰^{めんくら}つてたじろいだ。

「う・・・え、えっと」

「ちゃんと答えてください！！」

「ひゃい！！」

おっと、マリアが般若^{はんにゃ}に見えて悪寒が走ったからかんでしまったではないか。

「普通に俺らが翼をもって飛べるってイメージして背中に翼が生えているようにもイメージして、後は俺は飛べるって念じたただけだが？」

よし！！今度はちゃんと言えたぜ

「呆れてものも言えません・・・もうこのあたりでいいでしょう。すいませんね、私の好奇心につき合わせてしまっただけ」

「いいさいいさ。それとひとつお願いがあるんだけど」

「お願い・・・ですか？」

「ああ」

「俺たちをここの学園に入学させてくれ」

「私からも頼むわ」

俺たちはこの世界に来てまだ日が浅いしな。この世界について学ぶのもいいと思うし、何より魔法学校ってあこがれるじゃん？

「この国の魔法学園にですか？」

「ああ」

マリアは少し考え、決断した。

「お父様に少し無理を言えはいけるでしょう。分かりました。その件については私が何とかしますが理由だけ聞いてもよろしいでしょうか？」

「俺たちが行っても説得力はないかもしれないが俺たちは魔法というものをあまり知らない。だから魔法について詳しく知りたいんだ。万が一のためにも極めたい。これが理由だ」

・・・なんかシリアスな感じになったな、まあいいか」

「分かりました。そういうことなら大丈夫ですね」

「・・・信じてくれるのか？こんな正体の怪しい俺らを」

「はい。悪いことをするような人が先ほどのようなことを言うわけないじゃないですか」

マリアが当然だとばかりに胸をあるので笑えてきた。

「ぶっ・・・あはははははは！！面白いやつだな！マリア！お前は今まで会った奴の中でほんと最高だよ！！」

「それは嬉しいですわね♪私もキンジのこと面白いと思いますよ？」
数時間、お互いを褒めていたのは余談だ。

第2話（後書き）

やっとヒロインを出せます。

無意識的に小説を書くのはすごいのでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7226t/>

チートな能力を持って転生した高校生

2011年10月9日00時22分発行